

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 21 日現在

機関番号：10104

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520484

研究課題名(和文) アバール語における動詞+動詞型の複合動詞に関する総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive study of V-V complex verbs in Avar

研究代表者

山田 久就 (YAMADA, HISANARI)

小樽商科大学・言語センター・准教授

研究者番号：60345246

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：アバール語は二つの動詞から構成される複合動詞を用いる。第一の動詞(動詞A)は連体形の現在時制、完了連用形などの非定形で現れる。本研究は、このタイプの複合動詞を対象とし、次のことに関して明らかにした。(1)どの動詞が動詞Bとして使われ、動詞Aにどのような変化形を要求し、どのような意味を持っているのか。(2)それぞれの動詞Bに対して、具体的にどの動詞が動詞Aとしてどの程度使われるのか。(3)それぞれの複合動詞はどのような統語的特徴(格や他動性など)を示すのか。(4)同じ意味を表すのに、一つの動詞Bに対して、動詞Aが二つの形式で現れることがあるが、どのような頻度差があるのか。

研究成果の概要(英文)：Avar uses complex verbs comprising two verbs (V1 and V2). The V1 appears in the non-finite form, e.g. the present tense form of the noun-modifying form, the perfective converb. This study answered the following questions: (1) What verbs are used in the V2 position, in which non-finite form does each V2 require the V1 to appear, and what semantics does each V1-V2 complex have? (2) What verbs are used as the V1 for each V2 and how often they are used? (3) What syntactic properties (e.g. case marking, transitivity) does each V1-V2 complex have? (4) Some V2s allow their V1s to occur in two non-finite forms to express the same meaning. How often the two forms are used?

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：アバール語 コーカサス 統語論

1. 研究開始当初の背景

アバール語の複合動詞に関しては一部の複合動詞に関してのみごく表面的なことがごく少数の文献で言及されているが、全く十分ではない。筆者は、これまでに、アバール語において動詞が単独で用いられた場合の格の現れ方と自動詞、他動詞などの動詞のタイプに関しての研究を行っている。本研究は筆者のこれまでの調査で集めたデータと研究の成果を利用して、複合動詞における動詞のタイプと格の現れ方についてさらなる調査・研究を行い、現在の研究をさらに発展させていくことを目指した。

2. 研究の目的

アバール語には動詞 A + 動詞 B のタイプの複合動詞が存在する。日本語の「食べている」、「食べ終わる」、「食べてしまう」のような複合動詞である。標準アバール語では動詞 A は連体形、連用形、不定詞などの非定形動詞で現れる。このタイプの複合動詞に関して、どのような動詞がどのような意味で動詞 B として使われるのか、それぞれの動詞 B に対して動詞 A はどのような変化形(非定形動詞の種類、時制、肯定・否定など)で、どのようなタイプの動詞(他動詞だけ、自動詞の一部だけなど)が使われるのか、動詞 A 単独と複合動詞で格の現れ方にどのような違いがあるのかということなどを記述言語学、理論言語学、社会言語学的な観点から明らかにする。

3. 研究の方法

これまでの研究で電子化し、必要に応じていろいろな文法事項の注釈を XML 形式で入れているアバール語のテキストや新たな電子化テキストを Perl や Java による自作のプログラムを用いて分析しながら、テキストに新たな注釈を入れ、また分析するという方法でテキストの調査を行うとともに母語話者に対して質問形式の調査を行い、文献等から他言語の関連する情報を集め、アバール語と他言語の共通点と相違点に着目しながら、研究を行った。

4. 研究成果

主要な研究成果を二つに分けて示す。

(1)アバール語の動詞の進行相は複合的に形成されるが、その形成方法について、「アバール語における動詞の進行相形の形成方法」という論文にまとめた。

アバール語の動詞の進行相は、多くの場合、形容詞的分詞(連体形)の現在時制形と存在動詞 AM-uk'ine「ある、いる」の組み合わせで表される(AM は一致標識を表す)。このことは先行研究で記述されている。しかし、アバール語のテキストには、形容詞的分詞の未来時制形と AM-uk'ine の組み合わせで進行相が表されている文がある。このことは先

行研究で記述されていない。アバール語で書かれている 18 冊の本を用いて、形容詞的分詞の未来時制形と AM-uk'ine の組み合わせによる進行相形について調査を行ったところ、この組み合わせで進行相を表す動詞はかなり限定されることがわかった。

私が調べたアバール語の全テキストにおいて進行相形動詞が 15,500 例ほど使われている。母音で終わる語幹の動詞は形容詞的分詞の現在時制形と未来時制形が同じ形をしているので、進行相形動詞が形容詞的分詞の現在時制形を使っているのか、形容詞的分詞の未来時制形を使っているのかが区別できない。約 14,000 例の進行相動詞が形容詞的分詞の現在時制形を使っているのか、未来時制形を使っているのかを区別することができ、そのうち形容詞的分詞の未来時制形を使っているのは、647 例(5%程度)である。したがって、大多数の進行相形動詞は形容詞的分詞の現在時制形を使っていることになる。

どのような動詞の進行相形が形容詞的分詞の未来時制形を使っているのかということ、まず言えることは、全てが自動詞であるということである。アバール語は自動詞としても他動詞としても使われる動詞がとても多くあるので、進行相形で使われている他動詞の例が全体でどのくらいあるのかは数えていないが、個別の動詞では、形容詞的分詞の現在時制形を使っている進行相形が 50 回以上使われている他動詞を例にしても、これらの動詞は形容詞的分詞の未来時制形を使っている進行相形では使われていない。アバール語には、自動詞と他動詞の中間的な動詞に経験者が与格あるいは第一位格で現れる二項動詞(斜格経験者動詞と呼ぶことにする)があるが、こうした動詞でも、全ての進行相形は、形容詞的分詞の現在時制形を使った進行相形である。

このように、形容詞的分詞の未来時制形を使った進行相動詞の大きな特徴として、自動詞に限定されることが挙げられる。しかし、あらゆる自動詞の進行相形が形容詞的分詞の未来時制形を用いているわけではない。50 回以上進行相形で用いられているが、全ての例で形容詞的分詞の現在時制形が使われている動詞がたくさんある。以下に、どのような自動詞が進行相形で形容詞的分詞の未来時制形を用いているのか述べる。

アバール語にはいろいろな擬音語動詞があるが、最も一般的なタイプとして、C1V1C1V1d-ize あるいは C1V1C2C1V1d-ize あるいは C1V1C2C1V1C2d-ize の形をしている擬音語あるいは擬態語と考えられる動詞がたくさんある。C は子音を、V は母音を表し、C、V に添えられた数字は同じ数字が添えられた音素は同じ音素であることを示している。たとえば、gargadize「しゃべる」。進行相形で使われている反復擬音動詞は 37 動詞であるが、そのうちで、形容詞的分詞の未来時制形と現在時制形の両方を使って進行相形を

表しているのは 11 動詞、未来時制形だけが 15 動詞、現在時制形だけが 11 動詞である。全ての反復擬音動詞をまとめると、進行相形に形容詞的分詞の未来時制形を用いているのは 75 例(61%)であり、現在時制形を用いているのは 47 例(39%)である。したがって、未来時制形と現在時制形の相対的な使用頻度に大差はないと言える。

アバール語には、基本となる動詞から作られ、「しばらく～する」、「繰り返し～する」、「～することに従事する」というような意味を持つ一群の動詞が存在する。こうした動詞を持続動詞と呼ぶことにする。基本となる動詞から持続動詞を作る方法としては、動詞の屈折語尾の型を変更したり、基本となる動詞の語幹に接尾辞を付けたりすることがある。屈折語尾の型を変更する場合、I 型あるいは IN 型を E 型に変更することしかない。一方、基本となる動詞に付加される接尾辞は -d, -ar, -anq などいくつか存在する。接辞 -d が付いてできた持続動詞は単語によって I 型の屈折語尾を取るものと E 型の屈折語尾を取るものがある。それ以外の接尾辞が付いてできた持続動詞はどれも I 型の屈折語尾を取る。持続動詞の進行相形における形容詞的分詞の未来時制形と現在時制形の使用数は次の表の通りである。

表 1

	未来	現在
E 型屈折語尾	119(53%)	105(47%)
-d + I 型屈折語尾	48(43%)	64(57%)
-d + E 型屈折語尾	47(32%)	98(68%)
-ar + I 型屈折語尾	26(58%)	19(42%)
-ard + I 型屈折語尾	34(71%)	14(29%)
-dar + I 型屈折語尾	6(75%)	2(25%)
-a(n)q + I 型屈折語尾	22(69%)	10(31%)
-aqd + I 型屈折語尾	10(56%)	8(44%)
合計	312(49%)	320(51%)

持続動詞全体では、進行相形を表現するのに形容詞的分詞の未来時制形が 312 例で用いられていて、現在時制形が 320 例で用いられている。未来時制形と現在時制形の相対的な使用頻度はほぼ互角である。

アバール語には名詞あるいは形容詞から派生した動詞が存在する。名詞に接辞 -d を付加して作られた I 型の屈折語尾を取る動詞がいくつかある。たとえば、名詞 zigar「不平」から作られた動詞 zigar-d-ize「不平を言う」。また、形容詞に接辞 -d が付いてできた I 型の屈折語尾を取る動詞、接辞 -d が付いてできた E 型の屈折語尾を取る動詞、接

辞 -dar が付いてできた I 型の屈折語尾を取る動詞が少数個ある。名詞および形容詞から動詞を作った方法は、基本となる動詞の語幹から持続動詞を作る方法の一部と同じである。このようにして名詞あるいは形容詞から作られた動詞も進行相を形容詞的分詞の未来時制形と存在動詞の組み合わせで表現していることがある。名詞、形容詞に接辞 -d あるいは -dar が付加してできた動詞の進行相形における形容詞的分詞の未来時制形と現在時制形の使用数は次の表の通りである。

表 2

	未来	現在
名詞 + -d + I 型屈折語尾	11(48%)	12(52%)
形容詞 + -d + I 型屈折語尾	4(100%)	0(0%)
形容詞 + -d + E 型屈折語尾	1(100%)	0(0%)
形容詞 + -dar + I 型屈折語尾	14(58%)	10(42%)

基本となる動詞から持続動詞を作るのに使う接辞とは違う接辞を使って名詞から動詞を派生させることがある。名詞に接辞 -g" あるいは -x をつけて IN 型の屈折語尾を取る動詞を作ることがあり、意味は「当該名詞がいっぱいになる」あるいはそれからの比喩的な意味になる。このタイプの動詞も進行相を表すのに形容詞的分詞の未来時制形が使われている。接辞 -g" と接辞 -x が付加されてできた動詞の進行相形での形容詞的分詞の未来時制形と現在時制形の使用は、名詞 + -g" + IN 型屈折語尾で、未来時制形 4 例対現在時制形 2 例で、名詞 + -x + IN 型屈折語尾で、未来時制形 0 例対現在時制形 6 例である。名詞に接辞 -x が付いてできた動詞の進行相形で形容詞的分詞の未来時制形が使われていないことをどう解釈していいのかは、全体の使用例が 6 例しかないため、今のところ判断を保留するしかない。

他の単語から派生した動詞にも進行相形を作るときに形容詞的分詞の未来時制形を使っている例がある動詞は、q'erl"-eze「争う」、xen-eze「動き回る」、shshen-eze「(雨が)しとしと降る」、q'en-eze「黙っている」、g'en-eze「落ちる」、sheshk'-eze「あちこち探す」、g'1od-ize「泣く」、x'wad-ize「進む、向かう」、AM-asand-ize「遊ぶ」、qud-ize「騒音をたてる」、sud-ize「ひりひりする」、inahd-ize「思い焦がれる」、q'acan-dize「争う」、swad-ize「うとうとする」、garach'war-ize「しゃべる」、ine「行く」、

AM-ach'-ine「来る」、AM-ag"-ize「争う」、unt-ize「痛む」、x1alt'-ize「働く」、qurshsh-ize「ほじくる」である。これらの動詞を見て気づくのは反復擬音動詞、持続動詞、名詞および形容詞から派生した動詞と音韻的に似ている動詞が多いことである。もともとはなんらかの基本となる動詞から派生した持続動詞であり、その基本動詞が使われなくなった可能性もある。それ以外の動詞は持続動詞等とは違ったパターンをしている。こうした動詞の進行相形が形容詞的分詞の未来時制形を使う動機付けははっきりしないが、こうした動詞の進行相形が形容詞的分詞の未来時制形を用いている頻度は反復擬音動詞、持続動詞、名詞および形容詞から派生した動詞と比べて比較にならないほど低い。

アバール語は山岳地帯で話されていることもあり、方言間でいろいろと大きな違いがある。標準語でも方言からの影響と考えられる作家間での差がいろいろな点で多く見られる。進行相動詞が形容詞的分詞の未来時制形を用いて作られることがあることを述べている文献は見あたらないことから、標準語とかなり違っている方言が話されている地域出身の作家が形容詞的分詞の未来時制形を用いた進行相動詞を使っている可能性もある。しかし、私が調べた範囲では、形容詞的分詞の未来時制形を用いた進行相形を使っていない作家はいないので、形容詞的分詞の未来時制形の使用が一部の個人に限定されているとは考えられない。

(2)動詞A(完了連用形)+動詞Bのタイプの複合動詞の調査・研究を行った。

アバール語では、動詞A(完了連用形)+動詞Bのタイプの複合動詞が使われる。類似のタイプの複合動詞を持つ日本語などに比べて、動詞Bとして使われる動詞の数はとても少ないし、こうした複合動詞自体の使用も少ない。動詞Bとして使われる動詞は、AM-uk'ine「ある、いる」、xut'-ize「残る」、ch'-eze「止まる、止まっている」、l"ug1-ize「終わる、終える」、AM-aq-ine「(1)立つ、(2)移動する」、t-eze「残す、去る」、AM-ach'-ine「来る」、ine「行く」、kk-eze「(1)起こる、(2)移動する、他」、l"uh-ine「(1)起こる、(2)移動する、他」、rex-ize「投げる」、AM-a-ze「(1)(粉末など)をまく、他」、AM-ix'-ize「見える」でほぼ全てである。

これらの動詞Bが、それぞれ、どのような動詞Aと一緒にどれくらい程度で使われるかをアバール語で書かれている本16冊のテキストの使用例から明らかにした。また、動詞Bとして使われる場合にどのような意味で使われるか、複合動詞全体の統語的な振る舞いの特徴などを明らかにした。

最初に、AM-uk'ine「ある、いる」とxut'-ize「残る」である。AM-uk'ine「ある、いる」は、結果相、すなわち、動詞Aによって表さ

れる動作の結果の持続を表す。一方、xut'-ize「残る」は動詞Aによって表される動作の結果のさらなる持続を表す。これらの動詞Bは動詞Aとしているいろいろな動詞を取る。動詞Aが自動詞の場合は、主語は絶対格で現れる。動詞Bが他動詞の場合、AM-uk'ine「ある、いる」では多くの場合、主語は能格で現れるが、少数ながら、主語が絶対格で現れることもある。一方、xut'-ize「残る」では、他動詞の主語は常に絶対格で現れる。AM-uk'ine「ある、いる」とxut'-ize「残る」の特徴として、動詞Aが特定の自動詞であると、その主語が属格名詞で修飾させている場合、その属格名詞と元々の絶対格名詞がともに絶対格で現れることがあることである。たとえば、「AのBが変化している」と「AがBが変化している」が並立できるような感じである。

ch'-eze「止まる、止まっている」は、意味的にはAM-uk'ine「ある、いる」やxut'-ize「残る」と近く、動詞Aによって表される動作の結果の持続を表す。主語は人間が来ることが多く、動詞Aにはある程度限られた動詞が使われる。動詞Aが自動詞の場合も他動詞の場合も、主語は絶対格となる。AM-uk'ine「ある、いる」やxut'-ize「残る」と違って、二重絶対格構文では使われない。また、AM-uk'ine「ある、いる」やxut'-ize「残る」は連体形の現在時制の動詞Aとともに使われることがあるのに対して、ch'-eze「止まる、止まっている」はそのような使われ方はしない。

l"ug1-ize「終わる、終える」とAM-aq-ine「(1)立つ、(2)移動する」は、「～し終える」ことを表す。動詞Aにはいろいろな動詞が使われる。l"ug1-izeもAM-aq-ineも、動詞Aが自動詞の場合、主語は絶対格であるが、他動詞である場合、主語は能格である。l"ug1-izeおよびAM-aq-ineも使役形l"ug1-iz-a-AM-i-zeおよびAM-aq-in-a-AM-i-zeで「～し終える」を表していることがある。非使役形の場合、動詞Aは自動詞であったり、他動詞であったりするが、使役形の場合は、動詞Aは常に他動詞である。

t-eze「残す、去る」は動詞Aによって表される行為の完全な達成を強調するために用いられことが先行研究に記述されている。基本的にはそのようであるが、動詞Aにもよるが、t-eze「残す、去る」との組み合わせと単独での使用でほとんど意味に違いが感じられないことも多いようである。t-ezeは他動詞か斜格経験者動詞とともに使われる。k'och-ene「忘れる」はt-ezeと使われている数が最も多い動詞Aである、k'och-ene「忘れる」の全使用例である690例のうち464例がt-ezeといっしょに使われている。これは圧倒的に多い数字で、t-ezeとの使用が10例を超える動詞は、8動詞しかない。そのうち、rex-ize「投げる」は、t-ezeとともに用いら

れると、「捨てる」という意味になり、単独で用いられる場合と意味のずれが見られる。

AM-ach'-ine「来る」および ine「行く」は、動詞 A によって表される行為の完全な達成を強調するために用いられるのが基本的な用法であるが、t-eze 場合と同様に、動詞 A 単独での使用とほとんど意味に違いが感じられないことも多いようである。AM-ach'-ine「来る」および ine「行く」は、ほとんどの場合、自動詞である動詞 A とともに使われる。AM-ach'-ine「来る」あるいは ine「行く」とともに使われる動詞 A の種類はそれほど多いわけではない、AM-ach'-ine「来る」か ine「行く」との組み合わせの使用例が 5 例以上ある動詞は次の動詞ぐらいである。AM-ach'-ine「来る」とだけ使われている動詞が、AM-akk-ize「現れる」_ユ g1-eze「育つ」_ユ AM-izh-ize「育つ」_ユ iv. bur-ize「沸く」_ユ t'eha-ze「咲く」_ユ、ine「行く」とだけ使われている動詞が t'erx'-ine「見えなくなる」_ユ ssw-ine「消える」_ユ t'ag1-ine「無くなる」_ユ AM-ixx-ize「壊れる」_ユ AM-uk'k'-ine「しわしわになる」_ユ、AM-i-ine「とける」_ユ、shshushsha-ze「壊れる」_ユ l"ug1-ize「終わる」_ユ c'oro-ze「冷える」_ユ q'-ine「枯れる」_ユ sas-ine「静まる」_ユで、両方と使われている動詞が rah-ize「開く」_ユ AM-ek-ize「壊れる」_ユ AM-iq-ize「破れる」_ユ AM-ux1-ize「燃える」_ユ k"erx-ine「蒼白になる」_ユである。これらの例を見ると、何らかの出現あるいは成長を意味するような動詞 A は AM-ach'-ine「来る」と使われることが多いが、何らかの消滅あるいは縮小を意味するような動詞 A は ine「行く」と使われることが多いと見なすことができる。AM-ach'-ine「来る」および ine「行く」は自動詞の動詞 A と使われるのがほとんどであるが、動詞 A が自動詞の使役形である例が、AM-ach'-ine「来る」で 7 例、ine「行く」で 14 例ある。

kk-eze「(1)起こる、(2)移動する、他」は、動詞 A によって表される動作が主語の意思とは関係なく起こることを強調する。そのためか、k"izh-ize「眠る」といっしょによく用いられる。kk-eze といっしょに 5 回以上使われている動詞は 7 動詞しかない。全て、自動詞である。

l"uh-ine「(1)起こる、(2)移動する、他」は、意味的には何も追加しないようだ。この動詞は自動詞の動詞 A とだけ使われるが、その主語は人間であることがほとんどで、AM-uk'ine「ある、いる」や xut'-ize「残る」の場合と同様に、二重絶対格構文が可能で、この構文はとてもよく用いられる。

rex-ize「投げる」は、動詞 A によって表される行為の完全な達成を強調するために用いられる。t-eze「残す、去る」と基本的には同じ効果を持っているが、動詞 A として使われる動詞は違っている。テキストで 5 回以上使われている動詞は、ch'wa-ze「殺す」_ユ q'ot'-ize「切る」など 5 動詞だけである。

AM-a-ze「(1) (粉末など)をまく、他」は動詞 A によって表される行為の反復を強調する。アバール語では、動詞の語幹を反復することによって、動作の反復を表現することができ、この方法はよく使われる。たとえば、AM-iq-ize「裂く」の語幹 AM-iq を反復して AM-iq-AM-iq-ze「複数回裂く」ができる。AM-a-ze は語幹を反復した動詞を動詞 A として取ることがよくある。

AM-ix'-ize「見える」は「～することを試す」_ユ「試しに～する」ことを意味する。使用例は少なく、テキストに 52 例しかない。そのうちの 51 例は、命令形で使われている。動詞 A として使われる動詞も urg"-ize「考える」などごく少数の動詞に限られている。

上記の内容を 2013 年 12 月 15 日に国際シンポジウム「MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES」(国立国語研究所)で「V1(perfective converb) + V2 compound verbs in Standard Avar」というタイトルで発表する予定であったが、天候不良(雪)のため飛行機が運行されず、発表することができなかった。ただし、ハンドアウトは会場で配布された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

山田久就、アバール語における動詞の進行相形の形成方法、人文研究(小樽商科大学)、査読無、125 巻、2013、95-115

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 久就 (YAMADA HISANARI)

小樽商科大学・言語センター・准教授

研究者番号：60345246